

伊予国府跡推定地確認調査

調査名：伊予国府跡推定地確認調査

遺跡名：大町廃寺

調査場所：今治市中寺 500-1、501-1、473-1

調査期間：〈令和3年〉10月25日～12月24日

〈令和4年〉10月31日～11月29日

調査主体：今治市教育委員会

調査面積：〈令和3年〉108.5 m²

〈令和4年〉57.3 m²



調査の経緯

國府とは奈良時代に日本全国に設置された国庁を中心とする都市区域のことです。国庁は現在の県庁に相当する役所のことで各國に一つずつ置かれました。そのうち、現在の愛媛県にあたる伊予国につくられた國府を伊予国府と呼び、現在に至るまで様々な人の手によってその所在地が議論されています。今治平野のどこかにあったということまでは判明していますが、詳細な位置はいまだに特定されていません。

こうした状況の中、今治市教育委員会と愛媛県埋蔵文化財センターは平成28年度から共同で伊予国府に関する調査・研究を実施しています。平成28～30年にかけて企画展やシンポジウムを開催して、伊予国府に関連する考古学的な成果の整理・検討を行いました。

そこで注目されたのが、八町から四村にかけての蒼社川右岸地域です。この地域からは質・量ともに顕著な古代遺物の出土がみられ、古代官衙に関連する遺跡群の存在が予想されました。そして、このエリアの中でも特に可能性が高いと考えられるのが、真北方位の地割が残された中寺地区の一部です。今治平野では現在北東を軸にする地割が基本ですが、古代の役所は真北を基準にしているものが多く、この地区に残されている地割が古代に由来する可能性が想定されました。また、ここでは昭和60年に一度確認調査が実施されており、その際に古代瓦が出土する東西方向の溝状遺構が見つかっていることも大きな根拠の一つです。

以上の理由から中寺地区に国府に関連する遺跡が存在する可能性が高いと考え、令和3年度から確認調査を実施しています。

古代瓦を含む遺構が認められた範囲



5 レンチ



6 レンチ



7 レンチ



9 レンチから検出された溝

8 レンチから検出された溝

7 レンチから検出された溝



軒丸瓦（法隆寺式）

4 レンチから出土した古代瓦

1 レンチから検出された溝

2 レンチから検出された溝の南東角

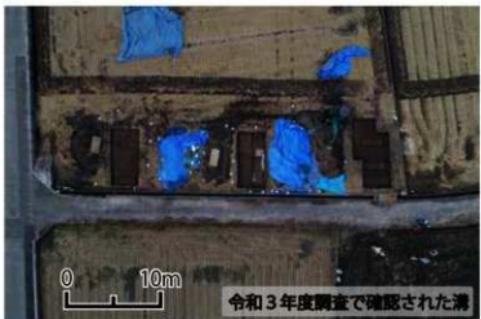


確認調査の成果

令和3年度の調査は、昭和60年の調査で確認された遺構が溝であるか確認するところから始まりました。実際に調査を行うと幅3m、深さ1m程度の溝であることが判明しました。溝からは古代瓦を中心に多くの遺物が出土しましたが、底部から上部にかけて15世紀代の土器が見つかっているため15世紀代に埋まり始めて、同世紀内で埋まり切ったと考えられます。溝の東西への延長は20数mにわたることが認められました。そして、何よりも大きな成果が南東角を発見できました。この角の発見により区画された領域の範囲を大きく絞り込むことができました。

また、西側の調査区では溝は発見できなかったものの古代の瓦を含む遺構の広がりが確認され、周辺にも古代の遺跡が展開していることを予想させます。

令和4年度の調査では、大溝の北側への延長を確かめるための調査を行いました。その結果、南東角から北へ60m以上にわたって溝が延長していることを確認しました。溝からは昨年度の調査と同じように瓦を中心とする遺物が見つかっています。詳細は検討段階ですが、古代に掘られた溝が何度も掘りなおされながら、中世まで使用されていた可能性があります。



令和3年度調査で確認された溝



令和4年度調査で確認された溝

今後の伊予国府跡推定地確認調査

令和3年度から4年度にかけての確認調査によって幅3m程の溝に区画された領域の存在が確認されました。今後はこの領域が何なのかを解き明かすために領域内部の調査を進めていく必要があります。内部で建物などの構造物を確認できれば、その規模や配置、出土遺物などによって領域の性格が明らかになる可能性が高いです。この遺跡が長年追い求められてきた国府なのか、それとも別の遺跡なのか明らかにしていくために、来年度も調査を続けていきたいと考えています。